日本福祉大学社会福祉学部
『日本福祉大学社会福祉論集』第 145 号　2021 年 9 月

〈研究ノート〉

デイヴィッド・ワインマン：
レドルと面接技法をつくったソーシャルワーカー

安　藤　健　一

要　旨

本稿は，社会福祉分野とくにソーシャルワーク実践における面接技法である「生活場面面接」にまつわる人物について考察するものである．そのため，本稿では“Children Who Hate”の執筆者であるフリッツ・レドル（Fritz Redl）とデイヴィッド・ワインマン（David Wineman）のうち，ワインマンに焦点を当てている．レドルはさまざまな論文等でも扱われてきており，その名も知れ渡っているが，共著者でありソーシャルワークの研究者であるワインマンについては日本ではあまり知られていない．彼は勤務校であったウェイン州立大学では名を冠した奨学金が設定されるなど重要な人物として扱われているが，論文等で扱われることは多くはない．とくに日本においては，この人物に焦点をあてられることはなかった．そこで，ワインマンのその人物像と児童の権利に関する活動を明らかにすることが本稿のひとつの目的である．また，ワインマンの論文に記述されたレドルへの評価を考察するものである．

キーワード：ワインマン，ソーシャルワーク，生活場面面接，レドル，児童の権利

1．はじめに

アメリカで情緒障害をもつ子どもたちの集団治療についての著書が出版されたのは 1951 年である．そのタイトルは“Children Who Hate”であり，その著者であるフリッツ・レドル（Fritz Redl）については，その後の社会的貢献を含めて，日本においても児童の集団心理療法分野では知られている人物である．一方，この著書の共著者であり，レドルらが向き合った情緒障害をもつ子どもたちの実験的治療施設の施設長を務めた人物であるデイヴィッド・ワインマン（David Wineman）については，あまり取り上げられていない．

例えば，日本で最初にレドルの功績を著作に掲載した青木（1957）は，その著書『非行少年』のなかで，レドルが開発した面接技法とレドルと直接交わした手紙の内容については触れている

が，ワインマンについての言及はしていない．また，日本においては，1975 年には『憎しみの子ら』が“Children Who Hate”の最初で最後の翻訳書として出版されているが，レドルとの共著者というワインマンの位置づけ以外に大きな関心が寄せられきたわけではない．レドルとワインマンの面接技法は，1985 年に出版された『教護院ハンドブック』でも紹介されているが，それは，青木が前出の著書で紹介した The Life Space Interview がそのままの文面で，レドルの面接技法として紹介されている．日本のソーシャルワークの分野では，1998 年に『ソーシャルワーク研究』誌において，生活場面面接の特集が組まれたことでレドルについての関心が高まったと考えられる．しかし，それらの特集論文においても，ワインマンに言及した論文はない．筆者も過去の著作のなかで，レドルとワインマンの The Life Space Interview については触れてきてはいるが，ワインマンを中心に据えたものは書いてきていない．

こういった事実をもとに，レドルとともに The Life Space Interview を開発した，ソーシャルワークの実践者でもあり研究者であるワインマンの人物像を考察していきたい．

なお，本稿では，筆者の著作で書き分けてきたように，レドルとワインマンの面接技法を“The Life Space Interview”（以下，The LSI）と表記し，久保（1991）以降，日本で議論されている「生活場面面接」とを分けて表記することを記しておく．

2．ワインマンについて

まずは本稿で主に扱う人物であるワインマンについて，説明しておく必要があると考える．レドルに関しては，辞書などでの扱いがあるが，ワインマンに関してはそのような記録は見つからない．そのため，比較的アクセスしやすい資料として，次に示す新聞記事を引用しておきたい．

David Wineman, 79, Authority On Issues of Troubled Children

David Wineman, a longtime social work professor who was an expert on disturbed children and advocate of children's rights, died on Wednesday at Grace Hospital in Detroit. He was 79 and lived in Southfield, Mich.

The cause of death was cancer, said his brother, Saul.

Mr. Wineman retired in 1984 after teaching for 33 years at Wayne State University's School of Social Work, in Detroit. At the time of his death, Mr. Wineman had spent a decade specializing in issues involving children's rights as a full-time volunteer for the Michigan chapter of the American Civil Liberties Union.

He was the co-author, with Fritz Redl, of two books regarded as seminal works and still in print after four decades. They are "Children Who Hate: The Disorganization and Breakdown of Behavior Controls"（1951, Free Press）and "Controls From Within: Techniques for the Treatment of the Aggressive Child"（1952, Free Press）.

（New York Times July 31, 1995, p.7）

この記事は，1995 年 7 月 31 日に発行されたニューヨーク・タイムズの新聞記事の一部であるが，見出しのように「トラブルを抱えた子どもたちの問題に関する権威」としてワインマンは紹介されている．続く記事では，「長年にわたり社会福祉学の教授を務め，障害をもつ児童の専門家として子どもの権利を擁護してきたデイヴィッド・ワインマンが，水曜日にデトロイトのグレース病院で逝去した．ミシガン州サウスフィールドに住む 79 歳だった.」と紹介されている．ここで重要なのは「社会福祉学の教授」,「障害をもつ児童の専門家」,「子どもの権利を擁護してきた」と記述されていることである．さらに記事では,「ワインマンは，デトロイトにあるウェイン州立大学のソーシャルワーク学校で 33 年間教鞭をとった後，1984 年に退職した.」とも記されている．つまり，ワインマンは，1951 年からウェイン州立大学のソーシャルワーカー養成の大学院にて教員をしていたという事実である．さらに，記事には「ワインマンには，フリッツ・レドルとの共著で，40 年経った今でも出版され続けている代表的な 2 冊の本がある．その 2 冊とは，“Children Who Hate: The Disorganization and Breakdown of Behavior Controls”（1951, Free Press） と“Controls From Within: Techniques for the Treatment of the Aggressive Child”（1952 年，Free Press）である」とその著書が紹介されている．さらに本稿には引用しなかった部分には，次のような記述がされている．

「1946 年から数年間は，デトロイトにある重度の障害をもつ少年のための施設，パイオニア・ハウスの所長を務めた．1950 年から 1968 年までは，ミシガン大学の障害児向けサマープログラムの臨床責任者を務めた.（中略）ワインマンは，子どもへの体罰，恣意的な停学・退学処分，里親制度や養子縁組制度の不備などに反対する活動を行っていた．議会や教育委員会での証言や，著書で多くの意見を述べた.（中略）彼はデトロイトで生まれ育ち，1937 年に現在のウェイン州立大学で理学の学士号を，ミシガン大学でソーシャルワークの修士号を取得した.」

ここまでは，ニューヨーク・タイムズの新聞記事を紹介したが，もう一つデトロイト・フリー・プレスの 1995 年 7 月 28 日号の記事の一部を引用しておきたい．

David Wineman, crusader for children

David Wineman, a well-known crusader for children's rights, died of cancer on Wednesday,

July 26, 1995, in Grace Hospital.

Mr. Wineman, 79, of Southfield, worked against corporal punishment inflicted on children, arbitrary suspension and expulsion from school, and the inadequacies of foster care and adoption during a career that spanned more than a half-century.

（Detroit Free Press July 28, 1995, p.30）

この記事は，ニューヨーク・タイムズよりも 3 日早く掲載されており，ワインマンの出身地の新聞であることや，扱われた内容もより詳しいことが資料として重要であると考える．最初の 1 行目には「1995 年 7 月 26 日（水），児童の権利を護る活動家として知られるデイヴィッド・ワインマンが癌のためグレース病院で亡くなった.」とあり，業績，死因，医療機関名が簡潔に並んでいる．続けて「ワインマン氏（79 歳，サウスフィールド在住）は，半世紀以上のキャリアの中で，子どもへの体罰，恣意的な停学や退学，里親や養子縁組の不備などに反対する活動を行ってきた.」と業績の内容を 1 行目よりも詳しく述べている．

2 つの記事による記載事項をまとめると，表 1 のように整理できる．

表 1　ワインマンの略年表（2 つの新聞記事から筆者が作成）

1916 年	デトロイトにて出生
1937 年	ウェイン大学（現・ウェイン州立大学）にて学士号を取得
19XX 年	ミシガン大学大学院にてソーシャルワーク修士号を取得
1946 年	パイオニア・ハウスの所長を務める
19XX 年	ウェイン州立大学ソーシャルワーク学校の教員となる（1949 年か 1951 年）
1950 年	ミシガン大学の障害児向けサマープログラムの臨床責任者（1968 年まで）
1951 年	レドルとの共著『Children Who Hate』出版
1952 年	レドルとの共著『Controls from Within』出版
1964 年	ACLU（American Civil Liberties Union：アメリカ自由人権協会） メトロポリタン・デトロイト支部　理事（19XX 年まで）
1966 年	デトロイト支部「子どもと若者の市民的自由に関するプロジェクト」設立
1984 年	ウェイン州立大学を退職 ACLU 事務所（ミシガン州）でフルタイムのボランティア （ポール・デネンフェルド法律部長の補佐で，児童の権利を専門に担当）
199X 年	『Encyclopedia of Social Work』第 19 版に「児童の権利」について執筆
1995 年	逝去（79 歳）

表 1 には，不明な年数の部分を「X」にて表記している．詳細な年数が不明であるが時期が推定されるため順序は正しいと考えられる．ただし，ワインマンが大学教員として赴任した年数については，2 つの記事における在職年数の記事内容に違い（33 年間と 35 年間）があり，また正確な年数を示す資料も現時点では発見できなかったため，デトロイト・フリー・プレスの記事を参考に，1949 年の位置に赴任した年の項目を入れていることを明記しておく．

このように新聞紙上に掲載された情報を整理しただけでも，ワインマンの一面が理解できるであろう．ワインマンのソーシャルワーク実践，研究成果である著書名，大学在職中にだけでなく

退職した後も児童の権利擁護に関する活動を行った事実，また活動分野は児童の権利を中心としたものであり，それらをもとにソーシャルワーク実践と研究を行っていたことなどが分かる新聞記事の内容である．

3．ワインマンと人権活動

ワインマンを理解する上では，晩年である，大学を退職した後も精力的に活動を行ったACLU（American Civil Liberties Union：アメリカ自由人権協会）について説明することが重要であると考える．

ACLUのホームページの記載によれば，ACLUは，第一次世界大戦後にロシアで起こった共産主義革命がアメリカ国内に伝播することを恐れ，市民的自由がその代償として脅かされたことと関連している．1919年11月から1920年1月にかけて，いわゆる左翼狩りである「パーマー・レイド」（Palmer Raids）が行われた．当時の司法長官であるアレキサンダー・ミッチェル・パーマー（Alexander Mitchell Palmer）は，何千人もの人々を令状なしに逮捕し，また不法な捜索や押収に対する憲法上の保護を考慮せずに逮捕して，残忍な扱いを行ったのである．このような状況から人々が蜂起し，ACLUが誕生したと説明されている．

その後，ACLUは，憲法に定められた権利を擁護する全米屈指の組織へと発展し，会員数は170万人以上，スタッフ弁護士は500人，ボランティア弁護士は数千人が活動に参加しているということである．ACLUは全米にオフィスを構え，言論や宗教，女性の選択権，適正手続きを受ける権利，プライバシーに関する市民の権利など，個人の自由を積極的に擁護し続けていて，アメリカ社会に深く根づいているという．

ACLUの活動初期に関わったものとして，1925年のスコープス裁判があげられている．これは，法律によって，聖書の天地創造説に反する理論を教えることが禁じられていたテネシー州で，高校の生物教師ジョン・T・スコープス（John T. Scopes）が，進化論を教えたとして逮捕されたことに端を発する．また，元国務長官ブライアン（Bryan, W.J.）が検事を務め，ACLUは弁護士クラレンス・ダロウ（Clarence Darrow）と組んで彼を弁護したことで，全米の注目を集めた裁判でもある．この裁判で，スコープスは有罪となったが，一方では検事側の主張が時代錯誤であるとの批判もあり，アメリカの宗教感覚の変化を示す結果になったと言われている．このように裁判は全国的な話題となり，ACLUは学問の自由の重要性を世間に知らしめる役割を担ったことになる．

また，ACLUは日系人の権利擁護の活動も行っている．1941年に日本軍による真珠湾攻撃の後，フランクリン・ルーズベルト大統領は，日系人全員を「強制収容所」に送るよう命じている．その数は，11万人以上とも言われているが，ACLUは，カリフォルニア州の支部を中心に，この残虐行為に対して単独で声を上げている．

ワインマンの活動とも重なってくる部分では，1954年の活動がある．ACLUはNAACP（Na-

tional Association for the Advancement of Colored People：全米国黒人地位向上協会）と協力して，公立学校での人種隔離に異議を唱えた．その結果，ブラウン対教育委員会裁判においてアメリカ合衆国最高裁判所の判決が下され，黒人と白人は「分離はしていても平等」という隔離時代に終止符が打たれた．ACLU の活動によって，「人種的正義の大きな勝利を勝ち取った」ことが記載されている．

ワインマンは，ACLU の一員として活動をするだけではなく，1964 年からは大学に勤務しながらもメトロポリタン・デトロイト支部の理事を務めている．また，大学退職後には子どもの権利を専門とするフルタイムのボランティアとして ACLU の活動を担っている．そのようなワインマンの活動の一端が『Education Week』の記事に紹介されている．『Education Week』は，1981 年から教育を扱う独立系ニュース組織で，アメリカの学校が直面している重大な問題の認識と理解を高めることを使命とする非営利団体である Editorial Projects in Education（EPE）が発行する新聞である．その『Education Week』（1985 年 3 月 6 日）に，トム・ミルガ（Tom Mirga）は「Detroit sweep Searches Challenged In First Use of T.L.O. Standard」（T.L.O. 基準を初めて採用したデトロイトの捜査活動に異議あり）という見出しで記事を書いている．

TLO とは，当時ニュージャージー州の高校に通っていた 14 歳の女子生徒のことである．この TLO が，学校内で学校職員によって持ち物検査を強行されたことで，麻薬の取引を疑われ，彼女は母親に警察署へ連れていかれている．そして，警察署で TLO が自白をしたため罪に問われた事件であり，法廷で審議された事件である．また，この事件を機に，アメリカ合衆国の最高裁判所が，公立学校において教職員によって行われる生徒の調査の合理性の基準を確立したものが，T.L.O. 基準である．ここでの争点は，合衆国憲法修正第 4 条「不当な捜索や押収に対して，人，家，書類，および所持品が安全であるという人民の権利は，侵されてはならず，令状も発行されないが，宣誓または確認，特に捜索する場所と，押収する人や物を説明する．」という点であったが，この事件では特に，不当な捜査と押収の禁止が，学校職員による捜査にも適用されると判示された．ただし，生徒が法律や学校の規則に違反するなど，合理的な疑いがある場合には，学校関係者による捜査が正当化されるとしている．

ミルガの記事は，これがデトロイトに初めて T.L.O. 基準が適用されたことに関するものであり，「デトロイトの教育委員会のスポークスマンであるリチャード・レビー（Richard Levy）」が語ったこととして次のように伝えている．「ある学校の生徒は，建物に入る際に，手持ちの金属探知機または固定式の金属探知機を一列に並んで通過しなければならず，場合によっては，麻薬探知用に訓練された 2 匹の警察犬の前を通ることもあるという．禁止品を所持している生徒は警察本部に連行され，保護者の保護下でのみ解放される」ということである．これに反対した保護者が訴訟を起こし，ACLU が支援提供を申し出たのである．そして，ミルガは，ワインマンについて次のように触れている．

「訴訟を起こした保護者に法的支援を提供することに同意した米国自由人権協会の州支部長補

佐であるデイヴィッド・ワインマンは，ウエスタン大学で検査を行った学校の警備員は，金属探知機を通過した後の生徒を無作為に選んで身体検査（patdown）を行ったと付け加えた．場合によっては，男性職員が女子生徒を身体検査することもあったとワインマン氏は主張している．（中略）ワインマン氏によると，訴訟を起こした親は，自分の学校で徹底捜査（shakedown）が行われても，子どもたちには捜査を受けないように命じていたという．事件当日，子どもたちは身体検査を受けることを拒否し，母親に電話する許可を求めた．校長室に拘束されていた子どもたちは，家に電話することを許可されたと，ワインマン氏は続けた．苦情を言いに来た母親は，学校の警備員に拘束され，子どもを家に連れて帰る前に身分証明書の提示を命じられた．（中略）『"T.L.O. での大量の捜査を正当化する理由はない』とワインマン氏は言う．『そもそも今回の捜索は，裁判所が設定した基準を下回っており，これらの個人を捜査する十分な理由もなければ，合理的な理由もなかった．このように考えると，（この捜査は）憲法上の保護を全く受けていないことになる』.」

1985 年に報じられた上述の記事によれば，ワインマンが ACLU のデトロイト支部長の補佐として，高校生の人権擁護活動を行ったことが分かる．このようにワインマンは，ACLU という組織を基盤とする人権活動，とくに児童の権利を護る活動をした人物であることが理解できるであろう．

４．ワインマンによるレドルへの評価

レドルとの共著書は有名であるが，ワインマンの単著論文は多いとは言えない．その中でもレドルについて論じている‘Fritz Redl: Matchmaker to Child and Environment - A Retrospective’（Wineman,D.1991.）を中心に，考察していくこととする．なお，ワインマンのこの論文は，“Residential Treatment for Children & Youth”という学術誌にレドルに関連する研究者の論文を集める形式で掲載されたものであり，その編者はウィリアム・C・モース（William C Morse）である．1991 年に編纂されたものであるが，その後，書籍にもなっており，筆者が入手しているものは，Routledge 出版によってペーパーバックとして 2016 年に出版されたものである．ワインマンの論文としては，1991 年のものと差異がないことを確認しているため，この書籍に掲載されている論文を中心に扱うこととする．

レドルに関しては，筆者の過去の論文等でも扱っているため，ここで改めて扱うことは避けるが，ワインマンの論文を詳細に分析する前に，編者であるモースについては，少し説明しておく必要があるだろう．モースについては，Routledge 出版版（2016）に編者としての紹介文があるため，それを引用しておく．ただし，モースは 2008 年に 92 歳でなくなっているため，この紹介文は，1991 年に書かれたものであると推測される．

ABOUT THE EDITOR

William C. Morse, PhD, is currently Research Professor at the University of South Florida and Professor Emeritus at the University of Michigan. For many years, he was Director of the University of Michigan Fresh Air Camp, a group therapy camp for disturbed and delinquent boys. The camp also served as a multi-disciplinary graduate training program for pediatricians, psychologists, social workers and teachers of disturbed children. Dr. Morse's recent publications have been on topics such as teaching disturbed children, children at mental health risk, and ecological interventions with disturbed children.

（編者について　ウィリアム C. モース博士は，現在，南フロリダ大学の客員教授であり，ミシガン大学の名誉教授である．長年にわたり，ミシガン大学のフレッシュ・エア・キャンプのディレクターを務め，騒がしい少年や非行少年のためのグループ・セラピー・キャンプを行っていた．また，このキャンプは，小児科医，心理学者，ソーシャルワーカー，障害児を対象とする教師のための学際的なプログラムとして機能するだけでなく，大学院トレーニングのプログラムとしても機能していた．モース博士の最近の著書には，障害児の指導，精神的リスクのある子どもたち，障害児への生態学的介入などのテーマがある．）（Moese ed 1991, 訳は引用者による）

モースについては，別稿で改めて考察したいと考えているため，詳細には触れないが，この紹介文を読んでも分かるように，ミシガン大学が行っていたフレッシュ・エア・キャンプのディレクターを務めた人物である．表 1 にも示したとおり，ワインマンはミシガン大学の大学院でソーシャルワーク修士号を与えられ，1950 年から障害児向けのサマープログラムの責任者を務めている．もともと，レドルが The Life Space Interview の原型となるアイデアを思いついたのもミシガン大学のフレッシュ・エア・キャンプであり，そこにはワインマンも参加していたことが明示されている．つまり，ワインマンとレドルとの関係性が生じ，実践者かつ研究者として互いを認め，協働し共著を記すまでの関係性をつくったきっかけは，モースが主催したフレッシュ・エア・キャンプであることは明白である．

ワインマンがレドルを尊敬していたことは，実験的治療施設であるパイオニア・ハウスの共同運営やその活動をもとに記された共著からも分かることであるが，ここではワインマンが前述の論文内でどのように扱っているかを確認していきたい．

Redl's paradigm of the ego dysfunctional, impulse ridden child presents the prima facie case for his contention that only a total treatment design in which every phase of the residential setting is involved could confront the full range of clinical challenges presented.

His writings on total design reveal both his passion for achieving a best-fit in the child-environment system and his genius at visualizing what might be called the psychosocial composition of clinical life space or regions which would conform to this criterion.

（レドルの自我機能不全，衝動に駆られた子どもというパラダイムは，住宅環境のすべての段階が関与する総合的な治療デザインのみが，提示された臨床的課題の全範囲に立ち向かうことができるという彼の主張の一応の根拠となっている．

トータルデザインに関する彼の著作には，子どもと環境のシステムをベストフィットさせたいという彼の情熱と，この基準に適合するような臨床生活空間や地域の心理社会的な構成と呼ばれるものを視覚化する彼の才能，この両方が表れている．）（Wineman 1991, p.34, 訳は引用者による）

レドルは非行少年のもつ自我統御が効かない原因を「非行自我」という概念で説明し評価されていたが，ワインマンはその治療のためのトータル・トリートメント・デザインを視覚化したことを評価し，論じている．

Few, if any, in the field of residential treatment of children rival Redl's intense absorption with the designing of activity programming as a full-fledged therapeutic tool, based upon his conception of the psychodynamic impact of activity on the impulse control balance of the child.

「アクティビティが子どもの衝動制御バランスに与える心理力学的な影響についての考えに基づいて，本格的な治療ツールとしてのアクティビティ・プログラミングの設計に熱心に取り組んだレドルに匹敵する人は，子どものレジデンシャル・トリートメントの分野ではほとんどいないだろう．」（Wineman 1991, p.36, 訳は引用者による）

ワインマンは，アクティビティを治療ツールとして用いたレドルの功績やその取り組みについて評価している．とくに，治療施設におけるトリートメントを開発したことを，ここでも評価しているのである．

Behavioral situations arising from within or without（or both）may require emergency help of interview proportions conducted in close proximity to the actual scene in which the behavior erupted, but at the side of the “action,” or close by in a convenient room or corner. After some years of experience with these occurrences, for which Redl coined the term “life space interview,” he differentiated two basic functions that were being served. In one which he called “emotional-first-aid-on-the-spot” the objective is short range and present oriented: reestablishment of ego control sufficient to get the youngster back into the program, a kind of elongated and more complex “antisepsis.” The other, termed by Redl “clinical exploitation of life events,” is long range and future oriented and attempts to extract from the experience involved whatever clinical gain might be drawn from it for long range

treatment goals.

（内側または外側（またはその両方）から発生した行動の状況は，行動が発生した実際の場面の近くで，しかしその「行動」の側で，または都合の良い部屋やその部屋の隅の近くで行われる割合が高いインタビューを緊急支援として必要とする場合がある．このような現象を何年か経験した後，レドルは「Life Space Interview」という言葉を作り，2 つの基本的な機能を区別した．一つは，彼が「その場での感情的な応急処置」と呼んだもので，目的は短期的かつ現在に向けられたものである．もう一つは，レドルが「ライフイベントの臨床的利用」と呼んだもので，長期的かつ未来志向で，長期的な治療目標のために，関係する経験から臨床的な利得を引き出そうとするものである．）（Wineman 1991, p.38, 訳は引用者による）

ワインマンは，レドルが生み出した面接技法である The LSI がもつ 2 つの機能について解説している．それは，緊急支援と中長期的支援という 2 つの機能を併せもつという解説であるが，それを簡潔に表し伝えている．また，それが長年の研究と実践から導き出したものであることを論じており，その成果を評価しているものである．

Clearly, while retaining the Freudian structural model Redl sees its constituent functions and processes as an open system, freely interacting with the surrounding environment. His approach—holistic, multifocal, present oriented—swings radically away from the atomistic, past-oriented, reductionism of the classical model.

（明らかに，フロイトの構造モデルを維持しながら，レドルはその構成機能とプロセスを，周囲の環境と自由に相互作用するオープンシステムとして捉えている．彼のアプローチは，全体論的，多局所的，現在志向であり，古典的モデルの原子論的，過去志向，還元主義から根本的に変化している．）（Wineman 1991, p.40, 訳は引用者による）

ワインマンが示しているのは，レドルの柔軟性や科学者としての姿勢である．レドルは精神分析学の流れをくむ自我心理学の理論をアンナ・フロイトから学びながらも，システム理論などの新しい知見を取り入れ，新たな理論的な枠組みをもち合わせた人物であると記載されていることが分かる．

Few of those in the children's field could think like Fritz Redl about the lives of children. He was always fresh, always in perfect rapport with their world whether in an action setting with live kids—camp, treatment home, ward—or lecturing to a seminar of ten or to a thousand psychiatrists at an Orthopsychiatry conference. He was a magisterial illuminist, emitter of a never-ending cascade of brilliant ideas in delightful, exciting and comprehensible forms that painlessly conveyed theoretical complexity and depth. He had wit, warmth,

and optimism. The legacy of his wisdom, a movable feast, is a precious source of nurturance for the minds and spirits of all, from the playground to the consulting room, who “deal with children.”

（子どもの分野で，フリッツ・レドルのように子どもたちの生活について考えることができる人はほとんどいなかった．彼は常にフレッシュで，常に子どもたちの世界と完璧に調和していたが，それはキャンプ，療育施設，治療棟などの実際の子どもたちとの活動の場でも，10 人のセミナーや矯正精神医学会議での 1000 人の精神科医への講義でも，同じであった．彼は，理論の複雑さと深さを苦もなく伝えるために，楽しく，刺激的で，理解しやすい形で，素晴らしいアイデアを尽きることなく発信する，偉大な啓蒙主義者であった．彼は，ウィットに富み，温かく，楽観主義者であった．レドルの知恵の遺産は，移動祝祭日のごとく，遊び場から相談室に至るまで，「子どもを扱う」すべての人の心と精神を養う貴重な源となっている．）（Wineman 1991, p.41, 訳は引用者による）

ワインマンは，論文の最後に，このようなレドルへの賛辞を書いている．短い文ではあるが，情緒障害をもつ子どもの研究の第一人者で，偉大な啓蒙家であり，明るい性格をもつレドルの人物像を描き出している．そして，レドルの功績が，執筆された当時も，子どもにかかわる人々に大きな影響を与えていることを伝えている．

5．さいごに

レドルを語るときに，ワインマンは欠かせない人物である．それは単に，“Children Who Hate”の共著者ということだけではない．レドルが心理学や教育学の分野での研究を推し進めたように，ワインマンは，ソーシャルワーク分野の研究者として，The LSI をソーシャルワーク分野でも根付かせようとした痕跡がみられるからである．

本稿で取り上げたワインマンの論文の最初の段落には，ノーマン・ポランスキー（Norman Polansky, 1918-2002）のレドルへの評価が記述されている．ポランスキーについて少し説明しておくと，彼はジョージア大学ソーシャルワーク学校の名誉教授であり，ソーシャルワーク研究の先駆者として知られている．ソーシャルワークの研究や実践，社会的孤立や児童のネグレクト問題に焦点を当てた多くの業績がある．ポランスキーは，メンタルヘルス分野での研究が有名であるが，同時に，児童分野での著名な研究者でもある．また，NASW の理事会メンバーであり，“Social Work”誌をはじめ，“Child Welfare”などの出版物の編集委員を務めた人物である．そのポランスキーがレドルに対して「『生の集団から重要な行動を引き出す天才』と評した」と，ワインマンは記述しているのである．

ソーシャルワーク研究の権威であるポランスキーが，レドルを高く評価したことを最初に記したワインマンの意図は，どのようなものであろうか．筆者は，そこにあるのはレドルへの尊敬の

念だけではなく，レドルらの知見をソーシャルワーク分野にどのように導入してくのかということを投げかけているワインマンからの研究者に対する挑戦かも知れないと思っている．

レドルとワインマンの The LSI には，精神分析学や自我心理学，そしてシステム理論や空間理論，さらに危機介入理論や生態学的アプローチの視点も取り入れられている．そのため，子どもを対象とする心理学や教育学の分野では広く取り入れられ，さらに発展し，ロング（Nicholas J. Long）の「Life Space Crisis Intervention」（生活空間危機介入）へとつながっている．

一方で，ソーシャルワーク分野では，The LSI は辞書などでは扱われはするものの，子どもを対象としたソーシャルワーク分野での活用は，アメリカ合衆国内や日本においても，あまり報告されていない．そういう意味でも，ソーシャルワーク分野での研究者であるワインマンの存在は，レドルを語る上でも，The LSI を語る上でも貴重であると考えられる．

本稿では，ワインマンを中心に取り上げてきた．児童の権利を護り，児童を対象とするソーシャルワークの分野で活躍したワインマンについて，取り上げられた内容は一部分でしかない．しかし，レドルとともに障害をもつ子どもたちの実践・研究をするだけではなく，ソーシャルワークの視点での子どもの支援を行ってきたワインマンへの理解が深まれば幸いである．なお，ワインマンが示した視点は，筆者が研究している生活場面面接を考える上でも重要な視点を提供している．それらは，今後の研究で明らかにしていきたい．

参考文献

- Redl, Flitz.（1966）When We Deal with Children. Free Press.
- Redl, Flitz. and Bernstein, M.（1963）The life space interview in the school setting—Workshop, 1961: 1. Life space interview in the school setting. American Journal of Orthopsychiatry, 33（4）, 717-719.
- Redl, Flitz. and Wineman, David.（1951）Children Who Hate. Free Press.
- Redl, Flitz. and Wineman, David.（1952）Controls from Whithin. Free Press.
- Redl, Flitz. and Wineman, David.（1958）The Aggressive Child. Free Press.
- Long, N. & Wood, M. & Fecser, F.（2001）Life Space Crisis Intervention. Austin, TX: Pro-Ed.
- Mirga, Tom.; Detroit ‘Sweep’ Searches Challenged In First Use of T.L.O. Standard. Educational News.1985-03-06.
- Morse, William C. ed.（1991）Crisis Intervention in Residential Treatment: The Clinical Innovations of Fritz Redl. The Haworth Press.
- Morse, William C.（2001）A half century of children who hate: Insights for today from Fritz Redl. Reclaiming Children and Youth10（2）, 75-78.
- Morse, William C. ed.（2016）Crisis Intervention in Residential Treatment: The Clinical Innovations of Fritz Redl. Routledge.
- Whittaker, J K. and Trieschman, A E. eds.（2009）Children Away from Home, Routledge.
- Wineman David.（1991）Fritz Redl:Matchmaker to Child and Environment - A Retrospective, Morse, William C. ed.（2016）Crisis Intervention in Residential Treatment: The Clinical Innovations of Fritz Redl. Routledge, 31-42.
- 青木延春（1957）『非行少年』全社協.
- 安藤健一（1998）「中学校の相談室での生活場面面接—相談ではない A 君とのかかわり」（特集：生活場

面面接)」『ソーシャルワーク研究』相川書房，24（3），191-195.
- 安藤健一（2001）「生活場面面接と面接構造」『立正社会福祉学研究』（立正大学社会福祉学会）2，89-93.
- 安藤健一（2008）「保育ソーシャルワークに関する一考察―保育士による生活場面面接の可能性」『清泉女学院短期大学研究紀要』27，1-11.
- 安藤健一（2009）「保育士養成課程における保育ソーシャルワークの可能性―生活場面面接への展開過程」『清泉女学院短期大学研究紀要』28，1-11.
- 安藤健一（2011）「生活場面面接の歴史に関する研究」『清泉女学院短期大学研究紀要』30，1-10.
- 安藤健一（2018）「生活場面面接の再考：『憎しみの子ら』を中心とした考察」『日本福祉大学社会福祉論集』138，47-61.
- 久保紘章（1991）「構造化されていない面接」『ソーシャルワーク研究』相川書房，16（4）.
- 久保紘章ほか（1998）「特集：生活場面面接」『ソーシャルワーク研究』相川書房，24（3）.
- 全国教護院協議会編（1985）『教護院ハンドブック』三和書房.
- 全国児童自立支援施設協議会編（1999）『新訂版　児童自立支援施設（旧教護院）運営ハンドブック』三学出版.
- F．レドル著，大野愛子・田中幸子訳，外林大作監（1975）『憎しみの子ら－行動統制の障害』全国社会福祉協議会.